
遠くて近い俺のマドンナ

田崎流々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠くて近い俺のマドンナ

【Nコード】

N70280

【作者名】

田崎流々

【あらすじ】

大学生の片桐シンジは、幼馴染の姉である美しくなった鮎川由美子にどうしようもない恋心を抱く。
八歳も歳の差を抱えた恋愛小説。

ブローグ

東京と千葉の境目あたりにある、駅前の大通りから少しはずれたアンティーク調の小さな喫茶店で、俺は彼女と久しぶりに出会った。いつも通りに部活が終わって、家に帰ってくつろいでいたとき、携帯から「オススメの喫茶店を見つけたから週末、久しぶりに会わない？」といったもは聞きたくても聞けない穏やかな声が届いたのだ。極度に緊張した俺は、声が裏返るんじゃないかと心配しながらつたなく、彼女のペースで、会う日にちと時間を決めた。

今は大会が終わったばかりの夏の日。

今年新年のお正月以来から会ってはいないから、彼女と会うのは約半年ぶりになる。

それまでは、パソコンや携帯での電子メールでしか、彼女と連絡は取らなかった。

声が聞きたくなかったわけじゃない、むしろ、自分は彼女には到底おいつけない目下の位置に自分がいるから面と向かいあうことがとても恥ずかしかった。

幼馴染、鮎川雄一の姉——鮎川由美子と。

当日の日、何を着ていくか悩んだ俺はクローゼットから服を全部ひっぺがし、なるべく普段とは違う、落ち着いた大人の格好をしようか、でもやはり無理をして背伸びをしている様を彼女に笑われはしないか、さんざ悩んだあげく、結局いつもより少し高めの服を選んだ。

歯も念入りに磨き、朝シャンもした。

鏡を見て、自分を見る。自分でいうのもあれな気がするが、一般的には色男と呼ばれるジャンルの顔立ちはしていると思う。スタイルだって悪くない。それに、言い寄ってくる女の子はたくさんいる。現在進行形で付き合っている女の子はいた。

その女の子とのデートの約束をキャンセルし、俺は彼女、由美子さんと会うことに決めた。

ただ、彼女に会いたかった。

今年の正月、幼馴染のよしみで鮎川家に遊びに行ったときを思い出す。

彼女は赤い晴れ着姿で、にっこり笑った。控えめな化粧と気品が印象的だった。

「ああ、片桐君。あけましておめでとう。」

そのときの感情は、今まで自分にはなかったものだった。

綺麗な人…それだけでは足りなかった。

自分の中で、欲情とか、そうしたものがあるのなら、まさにそれだったのかもしれない。

自分の中の、この人が欲しい、と思える様な気持ち…独占したいと思った。

このときに冷静で理性的な判別がつけたなら、俺は只の幼馴染の憧れの姉として見ていただけだったかもしれない。

もともと、小さい頃から鮎川家には遊びに行っていたから、そのたびに俺はいつも彼女を探していた。彼女はいつも綺麗だった。理想の女の人と聞かれればまっさきに彼女の名前をあげただろう。

まだ本当に小さかった幼稚園くらいときには、彼女と雄一と3人で千葉の海沿いをはしゃいで遊んだものだった。でも、その日の彼女を見た時、何故かもうすぐ十五を迎えようとしたとき、俺の中で違った気持ちが芽生えた。淡くて、砂糖菓子をはおぼったときに味わう様な甘い、とろける様な感情だった。

これが俺の本当の初恋なのかもしれない。俺はその時、隣にいた雄一を激しく羨んだ。

彼女は品の良い愛想笑いを浮かべて、俺の手にお年玉を握らせた。俺は受け取った後、雄一の部屋に入った。

雄一の取った写真を見た後、機会を窺って、俺はトイレに行くふりをして一人で家にいる彼女を探した。

彼女は庭で、花の手入れをしていた。

「あら、片桐君、どうしたの？こっちへ来て、リンドウの花私が植えたの。見てよ。」

俺はリンドウの花を見た。鮮やかな紫色と細い茎が彼女のイメージと良く似合った。

「雄一とはもうお開き？駅まで車で送っていいのかな？」

そう彼女が振り向いて言ったとき、俺は持っていたお年玉を持っていた手を彼女の前に突き出した。

「これ…お返しします」

振り絞る様に言ったとき、彼女は少し眉をひそめた後、「どうして？」と聞き返した。

「俺は…俺は…、貴方が欲しいんです。貴方の事が好きになったんです。」

彼女は、笑わなかった。不思議なものを見る眼差しで俺を数秒見つめつづけた後、ゆっくりとお年玉の袋を俺の手から取り、哀愁の様なこもった眼差しでにっこりと笑いかけた。

「……変った子。マセガキめ」

俺は恥ずかしさで真っ赤になった。雄一に、聞かれてはしないか心配になった。もし聞かれていたら……考えるだけでも恐ろしい。只、もうその時は、無我夢中で、拙く口説いている自分を冷静に認識するまで時間がかかった。

俺を冷静にさせたのは、彼女が次に見せた大人の、含んだ様な満足そうな視線だった。

「……でも、悪くないわ。でも、庭にでるときは今度は靴を履いてきてね。雄一のサンダル借りればよかったのに」

彼女はクスクス笑って言った。

彼女を探している最中、俺はずっと裸足だったのだ。

縁側で彼女に呼ばれて浮かれた俺は、裸足のまま庭に出てきてしまっていた。

「あ……」

恥ずかしさのあまり、気まずくて俯いて頭を下げ、上げたとき、俺は目の前に一枚の名刺を差し出された。

「それ、あたしのメルアド。と、携帯番号よ。また話でもしましょう。ほら、雄一に見つかるやばいでしょ、二階へ行った、行った」
彼女は笑いながら、俺に名刺を渡し、手でシッシツとポーズをとった。

俺は振り返りながら、縁側で、念入りに庭についた砂を落とし、「ありがとう、由美子さん」と言った。

「いっとくけど道は険しいわよ。覚悟なさい」

彼女はそれだけ言うと、また庭の手入れをし始めた。

俺は舞い上がった気持ちをいっぱいにして、雄一の部屋までいくまでの間、にやけそうになる口元を必死で隠さなければならなかった。

「随分、長いトイレだったね。大丈夫？ 片桐？」

「ああ、ごめんごめん、待たせちゃった」
その時、雄一の目が一瞬光った様な気がしたが、俺は気にしなかった。

それから、俺と彼女は連絡をこっそり取り合う仲になった。

電話や、携帯越しだったが、その向こう側で、彼女は今何をしているのか想像するのが楽しかった。

何より、彼女と繋がっていられるのが嬉しかった。

大抵は俺は部活の話や学校で面白かった話、告白されたのが男で驚いたという話をする、と

彼女は大抵懐かしい、と答えた。

何か物足りなくなった。部活や学校の話だけでは、彼女の世界と俺の世界を結ぶものがなくなってしまうので、雄一に教わった紅茶のいれ方や、コーヒーのいれ方、最近ハマっているテレビ、こっそり飲んでみた美味しいお酒の話をする、彼女はいいコーヒー豆の売ってる店や、紅茶をいれるときのコツ、社会的マナーなどを教えてくれ、話をするたびに、俺と彼女との距離を縮められる錯覚を呼び起こした。

そうして、大会前の部活の猛練習が始まって以来の連絡だったので、彼女から連絡が来た時には、俺は喜びのあまり、部屋でガッツポーズをとった。

俺は、今喫茶店で少し早く、彼女を待っている最中だ。

きっと彼女はアイス・カフェ・ラテを頼むだろう。

窓際のテーブルで、アイスミルクティーをストローでかきまぜて、窓越しに彼女が来そうな遊歩道の道行く人を探した。

すると、後のガラスの方からツンツン、と音がした。

振り返ると、俺が探していたほうとは逆方向に、彼女は立って、窓越しに俺の反応を楽しんでいた。

俺はまた、恥ずかしくなって曖昧に笑った。

彼女はというと、やっぱりあの正月の日に見た、彼女の笑顔そのものだった。

彼女と同じモノをみるとき

俺のすぐ斜め後にいる彼女。彼女は俺と並んで街を歩くとき、いつもおらずと斜め後ろから、彼女にしては長い俺の腕を組んで歩く。それは彼女の歩幅が俺より全然短いからで、少し前「背高めなのに短い足」とからかったら、彼女に真顔で頬をつねられた。それ以来「短い足」はNGワードなのだが、俺はマゾなんじゃないかと思う位、彼女につねられたことが嬉しかった。それだけ俺は彼女の中で男として認めつつあるのかな、なんて思ったりするからだ。

季節は東京の雪が溶けた冬。俺、片桐シンジこと十八歳。斜め後ろを歩くのは、幼馴染である鮎川雄一の姉、鮎川由美子さん二十七歳。

由美子さんは、身長百七十五cmの俺の頭半分位に頭が並ぶので、背は女性としてはそこそこ高め。IT関係の仕事についていて、独身だ。

でも、どうして由美子さんに決まった相手がないのか、結婚相手候補なり、婚約者なり、いても良さそうな気もする。いや、言い寄ってくる男なんてザラに見える程、物腰も、気品も、顔立ちもスタイルもいい。

遠まわしに弟の雄一に聞いてみたところ、そういう相手は今はいないそうだった。

「今は」というフレーズが少し気になったが、今斜め隣を歩く由美子さんの左指にもリングははめていなかった。

右指の薬指にボーナスで買ったというカルティエの指輪が光っているくらいだった。

もちろん、雄一には由美子さんが好きになっちゃったことは、全く話していない。いっちゃ悪いがやつはシスコンだ。俺と雄一が三歳から知り合って、その中に由美子さんが加わった時、雄一の由美子さんを視る視線は家族の域を超えていた。

この世で最も愛しいものを見る眼だった。恋人でも、家族でもない、かけがえのないもの。

聖書の光を見たような、それでいて秘めやかな何かを感じた。

今年のお正月、由美子さんに告白してから。俺の錯覚でなければいいが、由美子さんから来るメールの数が増えた様に思う。それだけで俺は嬉しかった。

今日の由美子さんは、グレーのコートの下に、花柄のワンピースにハイウエストのベルト。足もと黒いニーハイブーツ。ミニのワンピースから覗く細い太ももをどうしても意識してしまい、俺は歩きながらもぐつと理性で我慢した。

由美子さんにも、雄一には内緒にしてくれと頼んだ。

由美子さんの方から気を使ってくれているのか、それから二人で会う時間が増えた。

でも、俺は由美子さんが欲しいと言っておきながら、彼女とは手を繋いだり、腕を組んだりする他いっさいできなかった。それは一種かけひきめいたもので、彼女が年下の男と軽々しく寝る様な人に

なつてほしくはなかったし、俺は彼女の体が目当てだとも思われなくなかったからだ。

でも、せめてキス位はしたい、というのが本音だった。デートを重ねて帰り際、駅前でさようなら、またねとする時、彼女をその場で抱きしめ、キスをしたい衝動に何度かられたことが。

「もう、シンジ君待つてよお願い」

斜め後ろを歩いていたら由美子さんが呆れた様に溜息をついて腕を引っ張った。

「ごめん、由美子さん。俺ちょっと早歩きが癖でさ、ほら、由美子さん今日フリーマーケット行くんでしょ？ いいの売り切れちゃうと思うて」

その後、叱られるのかと思ったら、ふいに彼女は満面の笑顔になった。二十七とは思えない、ハリのある笑顔。

「ごめん、でもね。私、いつも通ってる街並みとかを眺めるのが好きなの。行き交う人のファッションとか、話し声。シンジ君は、そういうの嫌い？ もうちょっとゆっくり歩けば、変化に気付いて楽しいのに」

「え、でもフリマは朝の九時だから、もうすぐだよ？」

困惑の顔をする俺に向かって彼女は悪戯をばれた子供のように舌をだした。

「残念！ いやごめん、ほんとにフリマ、朝の十時からなの」

俺は啞然としてしまった。ちくしょー最初から計算だったか。その後、思わずニヤけた。

「そんなに俺と一緒にいたいのか？」

「そうかもね」

と彼女はふふふ、と笑いながらかわした。無邪気な顔を見せる反面、急にそんな大人な反応をされると、俺は正直不安になるのだった。

俺達は、それからゆっくり歩いた。なるほど、確かに街並みがゆっくり歩くと面白い。歩道の端で似顔絵を描くドレッドヘアの青年や、街の、店が開けていく慌しい空気の中にある活気。菓子を炊く匂いのする雑貨屋が看板を立てる。朝マックを食べるサラリーマン達が窓越しに談笑している。

由美子さんは女子大生のところどころ変わる個性的なファッションを見るのが好きだと言った。

エスニック、ギャル系、あげ嬢、ロリータ、パンク。さすが原宿の街だ。

「いっぱい色んな人がいるもんですね。でも、なんか由美子さんてトレンドじゃん。なーんか原宿って感じじゃないんだけど。六本木ならわかるけど」

俺がのんびりと言うと、由美子さんはまたふふふと笑った。

「確かに。でもね、私本当は、アパレル業界に行きたかった位これでも色んなファッションが好きなのよ。でも、着る勇気がないってやつ。どうしてもオーソドックスなのを選んでしまうのよね。その手の雑誌も見るのは好きだけれど、やっぱり生身の人を見るのが一番好き。てかもうこの歳でそれはないわよ」

「じゃあ、俺が裏原系のかつこで並んで歩いてもいい？」

「うーん。それとこれとは話が別」

話しているとどうしても顔がニヤけていくのがわかる。何故だろう、今のガールフレンドにもそんな素振りにはならないのに。

こうやって、肩と肩が触れ合う位隣にいる由美子さんは初めてで、俺は心臓の音が彼女に聞こえやしまいか不安だった。

ふわりと、つけている淡い香水の香りに酔ってしまいそうだった。

フリマをしている公園まで辿りついたものの、俺は気に入った古着のスーパードライのトレーナーやら、使い古しのアクセなどをどれも千円としなかったので、たくさん買い込んだ。俺は着こなしにポリシーはあるが、服にお金をあまりかけたくない方だったので、フリマや古着屋が大好きだった。

それを聞いた由美子さんが、原宿でフリマがあるよと誘ってくれたのだが、当の由美子さんはあまりにも節操なく物色したおし、あれもこれもと大きな紙袋に詰め込む俺を啞然として見つめて、カシミアの赤いストールを一つ買っていた。

買うだけ買って、俺達は公園の人ごみから離れた芝生に寝転んだ。冬の乾燥した冷たい芝生の匂いは、ツンツン脳を刺激した。気がつくとも朝が過ぎ、小春日和だったのか、陽の光が暖かい。

気がつくと、彼女は隣で寝息をたてて寝ていた。昨日の夜勤で徹夜だったというから、疲れたんだろうか。

なんと、あの由美子さんが無防備にも。俺はドキドキしながら肩にもたれかかり寝てくる由美子さんをちらりと見た時、

カシミアのストールの下から、色違いの黒いカシミアのストールが覗いているのを見た時、時間が止まった。

明らかに男物だった。いや、それは誰に送るつもりなの？ 雄一？ それとも……

あまりにじつと見つめすぎたのか、由美子さんのアーモンド形の目がパチリと開くと、透き通る様な笑顔を見せた。

そして、俺の首にその黒いカシミアのストールを巻きつけた。

「おそろい、だね？」

その笑顔があんまりにもかわいかったのと、美しかったのと、嬉しかったので、俺は彼女を思わず羽交い絞めにするようにその場で抱きしめた。

R a i n y D a y s

無理矢理テンションの高いトランスミュージックをかける。今日は土日だが朝からバイトが入っていた。

気分的にイライラして、朝布団から起き上がることも寒くて億劫だったが気合で起き上がると、胃に穴があきそうなブラックコーヒーを目覚まし代わりに飲み干す。低血圧で、朝は昔から苦手だった。でも、俺を苦しめているのは朝だけじゃなかった。横目で見るのも嫌になった物体を見る。携帯電話。

正月から約一ヶ月半位たった時、突然由美子さんとの連絡が途絶えた。

メールも、電話もいつさいも。

俺の方からではなかった、彼女の方からだった。

最初は、仕事が忙しいのだと思っていた。若手のOLなれば忙しいのは当たり前だ。あんまりしつこくするのも嫌がられる様な気がして、休日に挨拶程度のメールを出しても、最後に暇になったら連絡が欲しいと言ったのは、一ヶ月前だ。

俺は、たぶんきつと生まれて初めて、恋愛で追いかける側の苦しみ、痛みを知った。あの一月のフリマの時、おそろいのストールで笑顔を見せた彼女を見た俺は、理由もなく只この人についてきてくれるだろうと思っていた。

雄一に電話を入れて、世間話ついでに姉の由美子さんのことをさり気なく聞いたら、「元気に会社に行ってる」それだけだった。俺がここまで一人の女を追いかけたことなどなかった。

思えば、彼女とは、まだキスもしていないのだ。何が、俺の何が

いけなかったんだろう。と無償に寂しくて、騙されていたとか、遊ばれていたとか、ひまつぶし程度の相手だったとかいう疑いの不安を、一人の時間が多いと抱えきれなくなり、土日も含めてバイトをすることに決めたのだ。

それは、少しの諦めでもあった。働いている間は、忙しくて由美子さんを忘れていられると思ったのだ。

ブラックジーンズにポロシャツを羽織り、VAMSのスニーカーを履いて傘を差し、俺はバイトに出かけた。

冷たい春が来ようとする冬の終わり。もうすぐ三月だというのに、頭の芯も冷え込みそうな冷たい風が吹く。天気予報の今日の千葉は降水確率百パーセント。傘を破りそうな勢いで叩きつける豪雨をなんとか越えて、バイト先のコンビニへとたどり着く。

「おはようございます」

俺が自動ドアをくぐり、すでに雑誌売り場でいかがわしい週刊誌を広げているサラリーマン達をすり抜ける様に店員控え室を開けると、突然携帯が鳴った。メールだ。期待をしながらも諦めた顔で、ポケットから携帯を開いてみる。

件名 おはようシンジ

本文 今日講義終わったら、シンジのうち久々にあがっていい？

俺は苦い顔をした。差出人は山田里佳子。同じ大学、同じクラス。そして今はカタチだけの、俺の大学での彼女だった。

少なくとも、里佳子は俺のことを彼氏と疑っていないのだ。大学でミスコングランプリに選ばれた彼女が何故俺なんかと付き合おうと言いだしたのかはわからない。ただなんとなく、だ。会話のテンポ

と、ノリのよさとあきさせない人好きされる笑顔で、男子からも女子からも人気があった。里佳子とは大学入って席が隣同士になり、向こうからのアプローチもあり、流れる的に付き合っているという噂が流れた。

俺はぐつと息をこらえた。俺には今、好きな人がいる、とまだきちんと話してはいなかったのだ。

呆然と携帯の液晶画面を見ると、途端に上から影ができ、

「うわっ、なにこれ、エロッ」

と、聞きなれた声がして、しゃがみこんでいた体を慌てて起こす。「なんだよ、人のメール勝手に見るな」

いきなり声があったのは、同じバイト員の鏡裕子、まだ女子高生である。持ち前の馴れ馴れしさで、接客態度はナンバーワン、ときには、店の前でたむろする不良共とやりあう位の俺には見習いたい程の肝っ玉のでかい女の子だ。

「なあに、彼女？ あ、わかったわかった、前大学の帰り道だったって寄ってきた同じ学校の人っしょ？」

ズケズケと、裕子はちょうど一週間前のできごとをベラベラと話した。

そう、一週間前位に里佳子が珍しく俺が部活が終わるまで、待っていたといい、なんだか申し訳なかったので一緒に帰った。その時喉が渴いたといって立ち寄ったコンビニがここだったのだ。

そして運が悪く、このじゃじゃ馬娘の裕子がレジをやっているとこるに鉢合わせてしまい、その場で里佳子と裕子が一喜一憂してしまったのだった。あの件以来、彼女ということが裕子の頭の中にインプットされている。

「……そうだよ」

「へえーバイト終わったらさっそくチチクリあえるじゃん、良かったねえ」

どこのババアだよ、と思いながら俺は溜息をついて否定した。「関係ないだろ。大体首つつこんでくん。大体もう彼女と思って

ないし。俺の心の中じゃ別れてるよ」

疲れきって、携帯をマナーモードにしていると、突然裕子の脚が、ふくらはぎに鋭いローキックを放って飛んできた。

「お前いつから里佳子さんに、影でそんなこと言えるほど偉くなっ
たんだよ、彼女じゃないなら、さっきのメールはなんなんだコラ」

これには俺も頭が来てどなり返した。控え室の窓から怪訝そうに
こっちを見てくるサラリーマンが見えた。

「るっせせえな。関係ねえつつってんじゃん。うぜえよお前」

「じゃあ、こっちは毎晩毎晩、里佳子さんから電話で、別れるかも
しれないって、里佳子さん泣いてんだぞ！？ 相談受けてるこっち
の身になりや大事な人だよ、別れたいなら別れたいではっきり言っ
てやれよ！ かわいそうだろ」

怒鳴りかえされた俺は、言葉をなくしてしまった。里佳子と裕子
がそんなに、そこまで親密になっているとは思わなかったからだ。
女同士の恐さというものを痛感しながらも、俺は間抜けに口を開け
ていた。

「お前ら……連絡とってたんだ……」

唯一喉を搾り出す様にこぼれた言葉がこれだった。間抜けもいい
ところである。穴があつたら入りたい。

「お前が今日、里佳子さんにはつきりしないなら、私の方から連絡
するから、あんなチンカスやめとけって」

そいつって裕子は、さっさと作業衣を上に着ると控え室の扉を
蹴るようにして出て行った。

なんであのじゃじゃ馬は、こうも理由も聞かずにでしゃばり、物
事の展開をひっかきまわして喧嘩つばやいのか。早とちりだったら
どうするんだ。と心の中で悪態をついた。

時計を見ると、作業開始の時間まで後五分だった。俺はロッカー
の鍵を開けた。

嵐の後の静けさともいうのか、妙にシンとした控え室の中、作
業衣を羽織っていると、段々と裕子に言われた言葉がジクジクと針

を持って心に突き刺さってきた。確かに、ハッキリ伝えなければ、ならないことはあった。俺が勇気を出して由美子さんに告白した時とは違う、決別の勇気。俺が由美子さんを思っただけ泣きたい気分になっているのと同じように、里佳子もしかして、俺のことを思っただけ泣いていたのだ。

控え室を出ようとする数分、俺は急いで里佳子にメールを入れた。

件名 おはよう

本文 話があるから、午後の五時にうちに寄ってくれ。すまん

メールを打つ手が震えていた。思えば、自然消滅というカタチでしか、関係を終わらせたことのない青臭い俺にとつて、だれかとの関係を自分から絶つなんて、はつきりとしたことがなかったのだ。誰にも言えない恥ずかしいことだったと今痛感した。誰かを失って恨まれること。それが、この歳でも異様な程恐いものだった。

バイト中、裕子はほとんど俺を無視しまくった。女の友情って恐いもんかと思えば、裕子が何故あんなに里佳子と仲良くなつて、親密になったのかはわかる気がした。裕子は、このバイトを始める一週間前、通り魔に姉を殺されているのだ。

なんともできすぎた話だとは思うが、初めて里佳子を見た時、涙ぐんでいたのは、写真で見せてもらった裕子の殺された姉が、里佳子の顔立ちにうつすらと似ていた。顔かたちではなく、顔の持つ雰囲気、だ。

それを見ると、かなり良心の呵責が胸を締め上げた。羞恥心のあ

まり、レジの裏で縮こまって震えていたかった。

バイト、やめようかな。次はこのバイト探そうかな、なんてことを考えたりしているうちに、淡々とレジうち、検品、納品と機械の様に体は心とは裏腹にきちんと慣れでこなしていった。

俺も裕子とは目を合わさなかった。ただ、バイトが終わるまで、里佳子に告げる別れの言葉を考えていた。

S a y , g o o d b y e

雨はまだ、降り続いていた。コンビニの中でも、豪雨の雨音がひどい。障子を破った音が連続して聞こえてくるようで、まるで悪魔の小便のようで、みっともない自分を嘲笑っているかの様な錯覚に陥る。

ようやく終わったコンビニでのバイトを終えた俺は、寒さをしのぐために買った缶コーヒーとおでんをレジ袋に入れ、まだ勤務中の裕子のレジを向く。

「おつかれ」

裕子は俺を無視した。無理もなかった。俺は自分でも情けなくなる位、涙が出そうになった。ぐっと堪えて、客がいなくなつたのを確認して、言つた。

「ごめん。俺最低だよな。里佳子にメール打つた。返事きたよ。会つて直接話しをする。お前にも負担かけさせちゃったことは謝るよ」
裕子は相変わらず眼もあわせてくれなかったが、じっと見ていると、猫目のふちが涙に滲んでいるのが見えた。

「可哀想だ、里佳子さんが。お前明日バイト来なかったら殺す。ちゃんと終わらせたかどうか確かめてやる」

そう裕子は目も合わさず呟いた。里佳子はいいい友達、というか妹分を持ったな。心に暖かい気持ちが生まれてくると同時に、自分のしていたことへの罪悪感で胸がギシギシ痛んだ。

「じゃ、また明日な」

帰り際、時計を見ると、午後三時だった。里佳子と落ち合う場所は俺のアパート。まだ約束の時間まで、二時間もある。

俺は途中で本屋でバイク雑誌を買い、野菜の安いスーパーで夕飯のお惣菜を買って、重々しい足取りで玄関の戸を開けた。

最後に、里佳子が訪れて出すお茶をどんなものにするか考えていた。

別れの予感が漂う、部屋の中で、俺の頭は自責の念に捕らわれていた。

なんて薄っぺらい、男なのだろう、自分は。目先の、由美子さんという俺の片思いの欲望ばかり頭がいっぱいで、周りのことが全く見えていなかった。辛かったろうな、里佳子。好きな人が出来た時点で、別れを切り出すべきだったのだ。

自分のしていたことの不義理さに何故今まで気がつかなかったんだろう。筋を通す時は通すこと、それができない子供ではなかったはずだ。

わかっていた。俺は、自分のせいで里佳子が傷つき俺をおそらく恨むであろうことを恐れていた。

自分でいうのもおかしいことだが、自分は人に好かれることになれきっていた。それは、小さい頃から周りと合わせることが得意だったからだ、と自分では思う。俺は人の好意には好意を。敵意には敵意を。そのサバけた性格のおかげで、人付き合いに苦労はしたことはない。中学高校時代にもなめられたり、イジメにもあうことなく、学校でのいわば目立つグループの中に染まっていたから、逆に威圧的な奴だったかもしれない。

只、俺は自発的に他人に好意を覚えたことは少なかった。それは、愛されることになれなかった、人を少し見下した部分にあったのかもしれない。自分は自分のしたいことだけをしていれば、後から人はついてくるものだ。

俺は異性からの特別な好意を、今までほとんど受け流してすごした。わざと気付かないフリをしたり、アプローチをされれば合わせるが、心までは預けなかった。

何故か人を心から好きになったことはなく、押しに負けることで

以外、異性と付き合ったことがない、というのが本当のことだった。里佳子の場合もそうだった。結果誰とでも寝そうなの、色々風評がたったが俺は気にしなかった。

俺はふと、中学のときに読んだ「人間失格」の主人公に自分は似ているかもしれないと思っただった。考えすぎだが、それ位今の自分は気分は墜ちに墜ち、人に合わせて生きてきたという事実を全否定させられている気がした。何って、今のこの自分の感情が生み出す空気に。

里佳子は五時よりやや早めにやってきた。今までデートでも遅れてくることもなかった彼女らしかった。

「久しぶり、シンジ」

里佳子はいつも会うときはに cand 顔で笑顔を見せる。

里佳子を部屋にあがらせ、茶箆筭を開けると、眼に飛び込んできたのは由美子さんが送ってくれたイギリス産のダージリンだった。

俺は手を一瞬迷わせた後、隣にあった日東紅茶を手にしてお湯を沸かした。

今、由美子さんの匂いのするものには触れなくなかった。

部屋の中がしんと静まり帰り、通りで下校途中の中学生がふざけた声をあげるのが異様にうるさくて腹ただしい。

俺と里佳子はテーブルを挟んで、向かい合った。明るい里佳子が、長い睫を伏せて、何も言えなくなっている。

何分間か沈黙が続いた後、里佳子が重い口を開いた。

「どうしてずっと連絡くれなかったの？ いつもメールも電話も私の方からで。シンジは、私の事ほんとに好きなの？ はつきり言ってくれなきゃ……わからない」

俺は、その言葉の重みより、これからの展開を予測することに怯えてしまった。

「ごめん、里佳子。実は、好きな人がいるんだ」

そう言葉に出すと、眼裏に由美子さんが強烈に思い浮かんだ。自分でも、顔が熱く、眼が潤み、声もいつもの淡白さが熱に犯されていくのを感じた。

それと反対に、一瞬のうちに顔が青ざめて、眼から冷たそうな涙が頬を伝う、里佳子。朝に飲み込んだ苦いコーヒーの味よりもっと胃が痛くなる、切り裂かれる様な衝撃に、俺は里佳子から目がそれなかった。

「……いつから？」

震える唇で里佳子は問うた。

「二ヶ月前位。相手は社会人なんだけど、幼馴染の姉貴で。本気で好きなんだ。だから悪いけど別れてくれないか」

俺は自分で何を言っているのか上の空だった。今振っている雨雲の上だった。喋り、言葉にするたびに、相手が近くなる様な、今の状況に酔った由美子さんの存在を重く感じていた。

冷め切った紅茶が自分の顔にぶっかけられた。気性の荒い、里佳子がかけたものだった。

俺は只、じっと座り、里佳子を睨む様に見つめ、鼻をすすりはじめた里佳子に目を伏せた。

「わかった……さよならシンジ」

嗚咽まじりの声で里佳子は言う、バッグを持って俺の部屋を後にした。

俺は一人でその後、安心して動けなかった。ぽたぽたと、顔にかけられた冷たい紅茶が顔に流れていくのを感じた。

それが、自分の目から出るものも混じっているのか、自分に問いたい気持ちを抱いた。しばらくたった後携帯を開いて

里佳子のアドレスを消した。由美子さんからの連絡は相変わらず入っていないかった。

これは里佳子を泣かせた自分への罰か何かなのだろうか、と自分で考えたが。結局は俺に片思いをしていた里佳子の様に、俺もまた由美子さんを遠くに感じている、同じ穴のムジナなのかもしれないと俺は思った。

そう考えるのは、寂しい寂しい時間で。俺は苦手だった。

まるで小さな赤子の勘の虫が騒ぎ出す様に、何かあたたかいものを抱きしめて眠りたかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7028o/>

遠くて近い俺のマドンナ

2010年11月4日05時06分発行